

大学生における過去のいじめ経験に関する質問紙調査 —いじめ経験といじめの捉え方、および自尊感情との関係—

吉川 延代* 今野 義孝** 会沢 信彦***

A survey of undergraduates regarding their previous experiences
being bullied: The relationship between having been bullied and
how the bullying was perceived and self-esteem

Nobuyo YOSHIKAWA, Yoshitaka KONNO, Nobuhiko AIZAWA

How a bully and his or her victim perceive bullying must be examined to prevent bullying. This study surveyed 348 university freshmen (194 males and 154 females) attending two private universities in a metropolitan area. The survey yielded several results. The main reasons individuals became a bully were "imitating another bully," "the victim exhibited characteristic behaviors or attitudes," "relieving frustration," and "to prevent one's self from being bullied." The main reasons individuals were bullied were "interpersonal conflict" and "one's own personality and behavioral characteristics." Of the victims, 80% reported suffering "emotional scars that last a lifetime," "negative effects on one's own personality and behavior," and "distrust of others." Both the bully and his or her victim indicated that they expected school administrators and teachers to solve the problem of bullying. One's level of self-esteem may differ depending on how one perceives the impacts of bullying.

Key words : previous experience being bullied, how bullying is perceived, self-esteem, undergraduates
過去におけるいじめの経験, いじめの捉え方, 自尊感情, 大学生

問題と目的

昭和60年の文部科学省の定義では、いじめは「自分より弱い者に対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」「学校としてその事実を確認しているもの」「なお、起こった場所は学校の内外を問わない」とされていた。その後、文部科学省(平成19年)は、いじめの定義に「いじめか否かの

判断はいじめられた子どもの立場に立って行うこと」を加えた。この定義では、いじめを被害者の立場に立って捉える視点がさらに強調されることになった。その背景には、いじめ被害が不安や抑うつ、自尊感情の低下、心身症、対人不安、PTSD、自殺企図、不登校などの深刻な問題を引き起こし、心身の健全な発達を長期的に阻害させる恐れのあること(坂西,1995; 香取,1999; Beane, 1998; 岡安・高山, 2000; Frisen & Bjarnelind, 2010; 吉川・今野,2011)が挙げられる。しかし、いじめがもたらす精神的な悪影響は、いじめ被害者だけでなく加害者にも見られる(岡安・高山,2000)。Tehrani (2004)は、いじめ被害といじめ加害の両方の経験者がもっとも精神的健康度が

* よしかわ のぶよ 文教大学人間科学部非常勤講師

** この よしたか 文教大学人間科学部臨床心理学科

*** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部心理教育課程

低いことから、いじめの後遺症の問題は、いじめ被害者だけでなくいじめ加害者や、加害一被害に巻き込まれた者、それに加害一被害の両方の経験者についても見ていくことが必要であると述べている。

吉川・今野・会沢（2012）は、大学生を対象に、いじめの被害一加害経験と自尊感情との関係について質問紙調査を行った。その結果、いじめ被害経験者は被害経験がない者と比較して自尊感情が低いことや、いじめ被害といじめ加害の両方を経験した者はどちらの経験もない者と比較して自尊感情が低いこと、いじめ被害の程度が激しかった者はいじめ被害経験のない者と比較して自尊感情が低いことなどを見いだした。この研究では、小学校の中・高学年から高校にかけて継続的にいじめ被害を経験した者はいじめ被害を経験しなかった者よりも自尊感情が有意に低いことも見いだされた。

最近のいじめの特徴としては、一部の凶悪ないじめを除き、いじめの被害一加害関係は固定的ではなく、両者の関係が入れ替わったり、被害と加害の両方を経験するという状況が進行している。平成25年8月の文部科学省国立教育政策研究所の報告によると、平成22年から24年の3年間に、いじめ被害経験がある小学生と、いじめ加害経験がある小学生はともに90%近くに上っている。中学生では被害経験者と加害経験者がともに7割近くとなっている。このことは、被害者と加害者が入れ替わりながら、多くの子どもたちがいじめに関わっていることを示している。森田・清水（1986）は、いじめを「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者」という4層構造で捉えたが、今日ではそれらの境界が曖昧になり、「被害者」と「加害者」が入れ替わるだけでなく、「観衆」や「傍観者」も「被害者」や「加害者」と入れ替わる可能性がより一般化していることを示している。

今日的ないじめの実態を把握するためには、改めていじめの理由や原因、いじめの影響、いじめの捉え方などについて検討する必要がある。そこで、本研究では、大学生を対象に実施した質問紙調査の自由記述に基づいて、大学生が過去のいじめ経験をどのように捉えているかを検討する。ま

た、いじめ経験の捉え方によって現在の自尊感情にどのような影響が現われるかについても検討する。

方 法

1. 調査協力者

調査協力者は、首都圏の2つの私立大学に在籍する1年生362名である。1年生を対象としたのは、過去のいじめ経験をより鮮明に記憶していると考えたからである。調査は授業中に実施し、授業終了時に質問紙を回収した。このうち、記入漏れや回答に偏りのない有効回答者数は348名であった。その、内訳は男子194名(55.7%)、女子154名(44.3%)であった。それぞれの平均年齢は、男子が19.18歳(SD=1.07)、女子が18.76歳(SD=.72)であった。実施時期は、平成22年9月から11月である。

調査協力の依頼にあたっては、協力者に対して本研究の目的を文書と口頭で分かりやすく説明した。その上で、倫理面に十分配慮し、協力者は調査の途中いつでも協力を辞退することができることや、調査は匿名で行い、データは研究目的以外には使用しないことを説明した。

2. 質問紙の構成

(1) いじめ調査質問紙

いじめ調査質問紙は、「いじめ被害といじめ加害の有無」「いじめの時期」「いじめの様態」「いじめの程度」「いじめについての考え方」である。調査協力者は、小学校低学年時点までのいじめの記憶に遡って回答した。「いじめについての考え方」は自由記述である。「いじめ被害と加害の有無」と「いじめの時期」「いじめの様態」「いじめの程度」については、吉川・今野・会沢（2012）で発表した。本研究では、「いじめについての考え方」の自由記述を分析対象とした。

(2) 自尊感情尺度(山本・松井・山城, 1982)

この尺度は、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度10項目の日本語版である。各項目の評定は、「あてはまる」(5点)から「あてはまらない」(1点)の5段階で行った。

結 果

1. いじめ経験と自由記述者の割合

「いじめについての考え」の自由記述者数は、348名中288名（82.7%）であった。内訳は、被害経験者が55名中48名（87.3%）、加害経験者が59名中54名（91.5%）、被害経験と加害経験のどちらもある者が48名中43名（89.6%）、どちらの経験もない者が186名中143名（76.9%）であった。クロス集計の結果、いじめ経験の有無と自由記述者数との間には有意な関係があった（ $\chi^2=10.032$, $df=3$, $p<.05$ ）。調整済み残差分析の結果、

記述者数は加害経験者に有意に多く、どちらの経験もない者では有意に少なかった。

2. 自由記述の内容の分類

自由記述の内容をKJ法（川喜田,1985）によって分類した。その結果、Table 1 に示すように、「いじめの捉え方」（67.7%）、「いじめ加害の理由」（26.4%）、「加害者と被害者の原因」（19.0%）、「いじめ被害の理由」（18.6%）、「いじめへの対策」（17.4%）、「いじめ被害の影響」（8.7%）、「いじめ加害の影響」（1.4%）のカテゴリーに分類された。また、代表的な記述例をTable 2に示した。

Table 1 自由記述内容のカテゴリー一覧

[いじめの捉え方]	[いじめ被害の理由]
<ol style="list-style-type: none"> 1. 否定・反対論 <ul style="list-style-type: none"> ・絶対にいけない ・社会的に良くない ・許される行為ではない ・最低のもの ・人道的におかしい 2. 根絶への悲観論 <ul style="list-style-type: none"> ・根絶は困難 ・良くはないがなくなる 3. 加害者への非難 <ul style="list-style-type: none"> ・最悪の自己表現方法 ・人間性の欠如した者が行うもの ・弱い人間がいじめる ・精神的に弱い人間がいじめをする 4. 肯定・宿命論 <ul style="list-style-type: none"> ・人間の本能である ・なくそうとすると陰湿化する ・集団をまとめるために必要なもの ・人間の劣等感がいじめを生む ・自分よりも下の者を作って力で支配する ・やってはいけないが大人の世界にもある ・弱肉強食だからあってもおかしくない ・子どもの成長過程で生じるもの ・集団関係の強化に必要 5. いじめとふざけの区別の困難 <ul style="list-style-type: none"> ・からかいや冗談との区別が難しい 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間関係のもつれ <ul style="list-style-type: none"> ・恋愛関係の嫉妬 ・仲間割れ ・仲間関係の束縛 2. ねたみ <ul style="list-style-type: none"> ・成績が優秀だったから ・部長になったから ・レギュラーになったから 3. 自分の性格・行動的な特徴 <ul style="list-style-type: none"> ・人と話すのが苦手 ・弱い性格 ・自分の未熟な性格 ・精神的な不安定 ・学業の苦手 4. 容姿や体形 5. 偏見・差別 6. 不明・覚えていない
	[いじめ加害の理由]
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 相手の容姿や身体的特徴 <ul style="list-style-type: none"> ・容姿（太っていた） ・身体的な特徴 2. 相手の発達的な特徴 <ul style="list-style-type: none"> ・発達の遅れや知的な遅れ ・発達の障害 3. 相手の性格・行動・態度 <ul style="list-style-type: none"> ・自分との違い ・気に食わない

- ・相手が抵抗しないから
- 4. 欲求不満の発散
 - ・イライラの発散
 - ・もやもやした気持ちの表現
 - ・抑圧された不満の発散手段
- 5. 自分の性格・行動的な特徴
 - ・自己コントロールの不全
 - ・自分の未熟な性格
 - ・精神的な不安定
 - ・学業の苦手
 - ・優越感を持ちたいため
 - ・人の目を引くため
- 6. 周囲への同調
 - ・周りの空気に流されて
 - ・周りの雰囲気のにまれて
- 7. 自己防衛
 - ・自分が被害者にならないため
 - ・やり返さないとやられるから
- 8. 相手へのねたみ
 - ・目立っていたから
 - ・レギュラー争いから
- 9. 相手への忠告など
 - ・正義感から
 - ・部活を辞めたことへの避難
- 10. 自己顕示欲求
 - ・悪いことをしたかったから
 - ・目立ちたかったから
- 11. 不明
 - ・覚えていない

[加害者と被害者の原因]

1. 双方に原因がある
 - ・双方とも心の中に闇を抱えている
2. 被害者に原因がある
 - ・被害者は反撃をすべし
 - ・被害者は対策を打つべき
3. 加害者に原因がある
 - ・いじめる側は心の痛みが分からない
 - ・被害者の問題とするのは責任逃れ
 - ・どんな理由にせよ加害者が悪い
4. どちらにも原因はない

[いじめ被害の影響]

1. 一生続く心の傷
 - ・一生忘れることのできない悪夢
 - ・一生続く精神的な傷

2. 性格・行動への悪影響
 - ・違う性格になった
 - ・相手の人生を狂わせる
 - ・被害者はすべてを否定され、奪われる
3. 成長促進的な影響
 - ・いじめ被害経験で強くなった
 - ・加害者の気持ちが分かった
 - ・両方を知る者は後に強くなれる
4. 人間への不信感
 - ・周りの人が信じられなくなった

[いじめへの対策]

1. 学校や教師の役割への期待
 - ・学校教育で教えるべき
 - ・教師や周りの大人が気づくべき
 - ・いじめのない環境を作る
 - ・いじめの止め役が必要
 - ・周囲がケアすることが一番良い
 - ・差別や壁を作らない
 - ・皆で仲良くすること
2. 被害者への支援
 - ・被害者を孤立させない
 - ・自分の経験を活かして援助したい
 - ・強い気持ちでいてほしい
 - ・受け取り方次第でいじめはなくなる
3. 加害者への支援
 - ・加害者の心に耳を傾ける
 - ・加害者は被害者の苦しみを知って欲しい
 - ・自分がされて嫌なことはしないで欲しい
4. 双方への支援
 - ・双方のコミュニケーションを促す
 - ・双方の人権を考慮すること
5. 傍観者への介入
 - ・傍観者も態度をあらためるべき
 - ・周りの人は誰かに助けを求めるべき

[いじめ加害の影響]

1. 後悔
 - ・今思い返しても後悔している
 - ・その子を苦しめた
2. 反省
 - ・今でも深く反省している
3. 自分自身の見つめ直し
 - ・原因がわかり見つめ直せた

Table 2 加害経験者、被害経験者、両方の経験者、両方の未経験者の自由記述の例

[加害経験者]

Aさん：双方とも加害者・被害者、傍観者の責任と介入、根絶への悲観論

気に食わないことがあり、一週間無視してしまった。今思い返すと有り得ないことだなと。いじめる者もいじめられる者も加害者であり、被害者であると思います。いじめは決して許される行為ではないが、何らかの理由が少なからぬのではないかと思います。いじめを受ける側は、必死に外部へのSOSを出すべきであり、また見てみぬふりをする者たちが、一番罪深いことをしている。きっと、いじめは無くならないとは思いますが、いじめを苦に自殺してしまうような大事に至る事態を減らせたらいなと思います。

Bさん：否定・反対論、後悔・反省

クラスの男子がある1人の女子をいじめているのを見つけ、その頃、女子たちよりも男子たちと仲が良かった私は、一緒になって遊び感覚でいじめてしまった。かつていじめた経験のある私ですが、今ではいじめは絶対にしてはいけないことだと思います。こんなことを言う資格はないかもしれませんが、なぜならいじめられた方はとても嫌な思いをするからです。

[被害経験者]

Cさん：成長促進的な要因

障害があるので、地区の子どものグループに入れなかった。入ろうとしても無視されるといった形。良いものとも悪いものともいえない。結局はそれを受けとめる側の考えによると思う。自分が苦痛だと思っても、後々になって“あのいじめがあったから強くなれた”と考えられるようになることもある。逆に、いじめが苦で自殺してしまう人もいます。なので、いじめは、受ける側によって変わるものだと思います。いじめられていることの意味について考えないことはもったいないことだと思います。

Dさん：肯定・宿命論、加害者への支援

自分の当時の気弱な性格ゆえ。後にクラスが変わって解決した。いじめはあまり感心できることではないが、かといって人間の本質の中心です。感情の1つだと思う。大抵のいじめは、自らの不安や劣等感をぬぐうために行なっているものだと考えられる。自分より下をつくることで、自分に自信や安心を与えたいと無意識的に考えているのだと思う。いじめを解決するのなら、いじめられる理由を考えるのではなく、いじめている者がなぜいじめを行うのかという理由を探ることが重要だと考えている。

[加害・被害の両方の経験者]

Eさん：双方に問題あり、双方への支援

水道水を飲む際に、蛇口に口をつけてしまったこと。ドイツ生まれであることを知られたこと。身体的なもの。部活で皆が嫌な思いをしていることを本人に伝えたところ、その子1人を責める形になってしまい、苦しめてしまった。あってはならないものだと思います。いじめられた側にも問題があっても、いじめる側にも問題が必ずあります。中立な立場を保てる人を通して顔を合わせて話し合うことが必要だと思います。

Fさん：あそび感覚、肯定論

いじめは「あそび」です。すくなくとも軽いいじめは。いじめをしている人に、「いじめをしている」という感覚はありません。いじわるやからかい、つまり「いじり」程度のことで、毎日毎日、大人数でやれば、それは「いじめ」と変わりません。いじめる相手に異常な点をみつければ、むしろいじめは悪者をやっつける「いいこと」に変わるかも。

[加害・被害の両方の未経験者]

Gさん：いじめは必要悪、加害者のケアの必要性

いじめについては、良くないことだと思います。でもある程度必要なことだと思います。いじめる側からしたら、ある種のコミュニケーションではないかと思うからです。いじめられる側からしたらとんだ迷惑ですが、もやもやが具現化した結果だと思います。だから、いじめた側の心のケアも必要だと思います。

Hさん：双方に問題あり、双方への支援

冗談といじめの境界線がとても難しい。でも当人が「いじめられている」と思ったらそれはいじめなのかなと思うが、いじめる方だけが悪いとは思えない。きっと少なからず人を不快にする何かがあって、いじめられてしまう子になると考える。当人たちの人間関係のことなので当人たちが解決しなければ意味のないことだが、仲介をしてあげるニュートラルな考えを持った人も必要だと思う。

3. 各カテゴリーの内容と割合

「いじめ加害の理由」はFigure 1に示すように、①周囲への同調 (25.0%), ②相手の性格・行動・態度 (17.1%), ③自分の欲求不満の発散 (11.8%), ④自己防衛の手段 (7.9%), ⑤相手の容姿や身体的な特徴 (3.9%), ⑥相手の発達的な特徴 (2.6%), ⑦自己顕示欲求 (2.6%), ⑧自分の性格・行動 (1.3%), ⑨相手へのねたみ (1.3%), ⑩相手への忠告 (1.3%), ⑪不明・覚えていない (25.0%) であった。

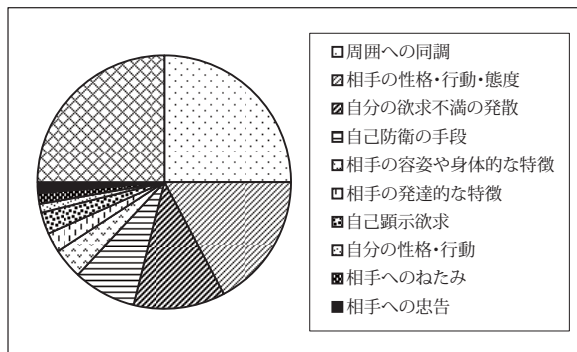


Figure 1 いじめ加害の理由

「いじめ被害の理由」はFigure 2に示すように、①人間関係のもつれ (22.2%), ②ねたみ (20.4%), ③自分の性格・行動特徴 (16.7%), ④容姿や体形 (16.7%), ⑤偏見・差別 (3.7%), ⑥不明・覚えていない (20.7%) であった。

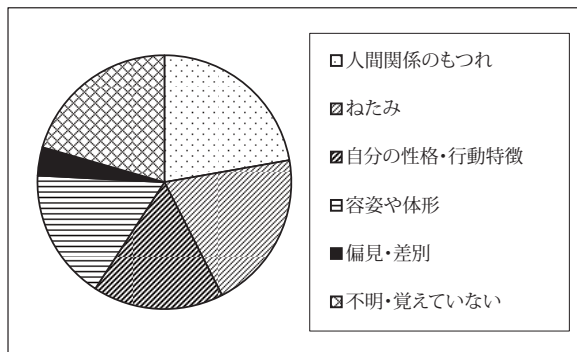


Figure 2 いじめ被害の理由

「加害者と被害者の原因」はFigure 3に示すように、①双方に原因がある (40.0%), ②被害者に原因がある (29.1%), ③双方が加害者でもあり被害者でもある (23.6%), ④加害者に原因がある (5.5%), ⑤どちらにも原因はない (1.8%) であった。

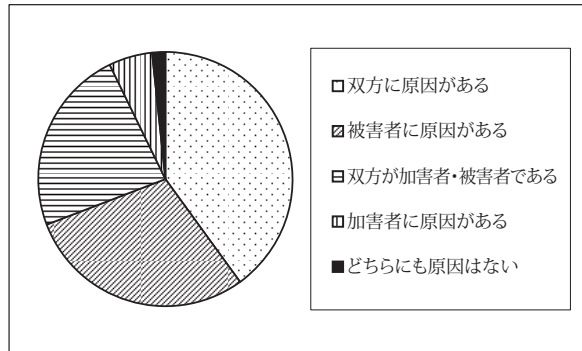


Figure 3 加害者と被害者の原因

「いじめ被害の影響」はFigure 4に示すように、①一生続く心の傷 (44.0%), ②性格・行動への悪影響 (28.0%), ③成長促進的な影響 (20.0%), ④人間への不信感 (8.0%) であり、8割はネガティブな影響を表していた。

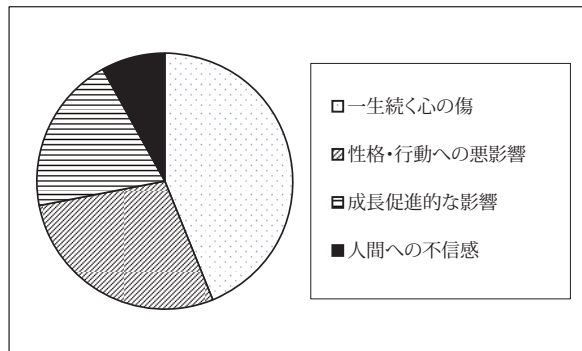


Figure 4 いじめ被害の影響

「いじめ加害の影響」はFigure 5に示すように、①後悔 (50.0%), ②反省 (25%), ③自分の見つけ直し (25.0%) であった。

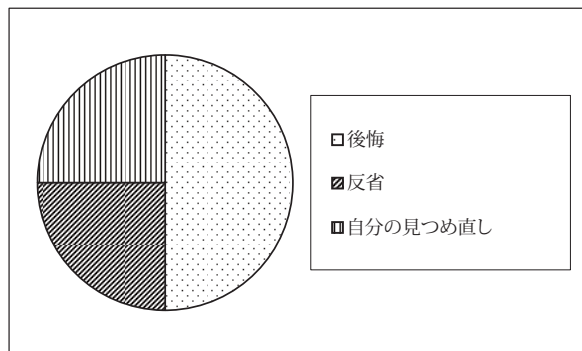


Figure 5 いじめ加害の影響

「いじめの捉え方」はFigure 6に示すように、①否定・反対論 (51.3%), ②根絶への悲観論 (17.9%), ③加害者への非難 (13.7%), ④肯定・宿命論 (10.2%), ⑤いじめとふざけの区別の困

難（6.2％）であった。

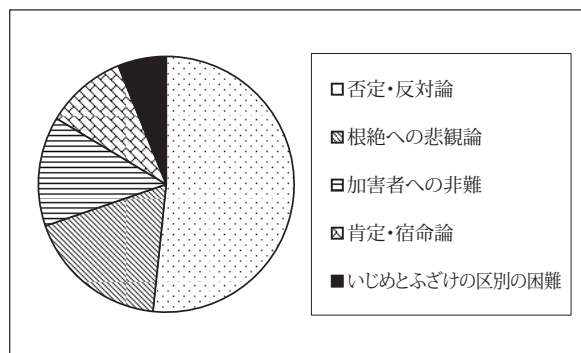


Figure 6 いじめの捉え方

「いじめへの対策」はFigure 7に示すように、①学校や教師の役割への期待（52.0％）、②被害者への支援（18.0％）、③双方への支援（16.0％）、④加害者への支援（12.0％）、⑤傍観者への介入（2.0％）であった。

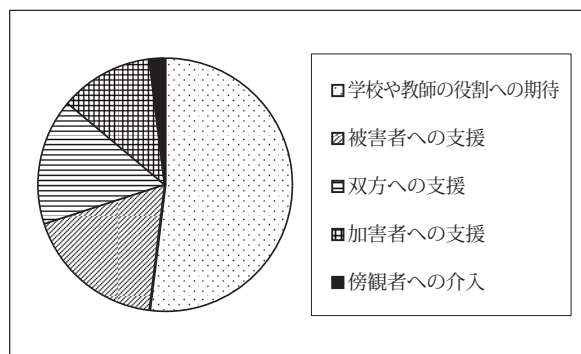


Figure 7 いじめへの対策

4. いじめ経験とカテゴリーの内容との関係

(1) いじめ経験と「いじめ加害の理由」との関係

クロス集計の結果、いじめ経験（「被害経験あり」「加害経験あり」「どちらもあり」「どちらもなし」）と「いじめ加害の理由」の内容との間には有意な関係が見られた（ $\chi^2=95.119$, $df=33$, $p<.001$ ）。調整済み残差分析の結果、「相手の性格・行動・態度」は「どちらもあり」群に有意に多かった。また、「周囲への同調」と「不明・覚えていない」は、「加害経験あり」群と「どちらもあり」群に有意に多かった。

(2) いじめ経験と「いじめ被害の理由」との関係

いじめ経験と「いじめ被害の理由」の間には有意な関係が見られた（ $\chi^2=155.731$, $df=18$, $p<.001$ ）。調整済み残差分析の結果、「自分の性格・行動特徴」は「どちらもあり」群に有意に多かつ

た。「人間関係のもつれ」は、「被害経験あり」群と「どちらもあり」群に有意に多かった。「容姿や体形」は、「被害経験あり」群と「どちらもあり」群に有意に多かった。「不明・覚えていない」は、「どちらもあり」群に有意に多かった。

(3) いじめ経験と「加害者と被害者の原因」との関係

いじめ経験と「加害と被害の原因」の内容との間には関係は見られなかった（ $\chi^2=17.428$, $df=15$, $n.s.$ ）。ただし、調整済み残差分析の結果、「被害者に原因がある」は「加害経験あり」群に有意に多く、反対に「どちらもあり」群では有意に少なかった。「どちらもあり」群では、「どちらにも原因はない」を挙げた者が有意に多かった。

(4) いじめ経験と「いじめ被害の影響」との関係

いじめ経験と「いじめ被害の影響」の内容との間には関係は見られなかった（ $\chi^2=15.685$, $df=12$, $n.s.$ ）。ただし、調整済み残差分析の結果、「性格・行動への悪影響」は「被害経験あり」群に有意に多かった。

(5) いじめ経験と「いじめ加害者への影響」との関係

いじめ経験と「いじめ加害者への影響」の内容との間には有意な関係が見られた（ $\chi^2=17.234$, $df=9$, $p<.05$ ）。調整済み残差分析の結果、「反省」と「自分自身の見つめ直し」は、「加害経験あり」群に有意に多かった。

(6) いじめ経験と「いじめの捉え方」との関係

いじめ経験と「いじめの捉え方」の内容との間には有意な関係は見られなかった（ $\chi^2=12.294$, $df=15$, $n.s.$ ）。ただし、調整済み残差分析の結果、「加害経験あり」群では、「加害者への非難」は有意に少なかった。反対に、「被害経験あり」群では「加害者への非難」が有意に多かった。「肯定・宿命論」は、「加害経験あり」群に有意に多く、「どちらもなし」群では有意に少なかった。

(7) いじめ経験と「いじめへの対策」との関係

いじめ経験と「いじめへの対策」の内容との間には有意な関係はなかった（ $\chi^2=18.360$, $df=15$, $p=.244$ ）。ただし、調整済み残差分析の結果、「どちらもあり」群では、「学校や教師への役割の期待」が有意に多かった。

5. いじめの捉え方と自尊感情

「いじめの捉え方」の内容ごとの自尊感情尺度の平均値は、Figure 8 に示すように、①「否定・反対論」を挙げた者が28.59、②「加害者への非難」を挙げた者が29.59、③「根絶への悲観論」を挙げた者が29.00、④「肯定・宿命論」を挙げた者が25.45、⑤「いじめとふざけの区別の困難」を挙げた者が23.50であった。一元配置分散分析の結果、これらの間には有意差が見られた ($F(5, 342)=2.371, p<.05$)。Bonferroniの多重比較の結果、「肯定・宿命論」と「いじめとふざけの区別の困難」を挙げた者の自尊感情は、「否定・反対論」や「加害者への非難」、それに「根絶への悲観論」を挙げた者よりも有意に低かった。

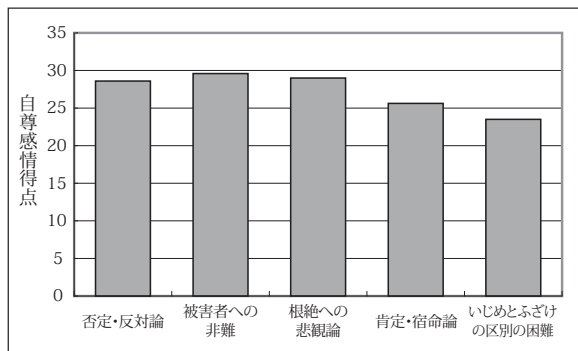


Figure 8 いじめへの所感と自尊感情との関係

「被害者への影響」の内容ごとの自尊感情尺度の平均値は、①「一生続く心の傷」を挙げた者が29.55、②「性格・行動への悪影響」を挙げた者が22.57、③「人間への不信感」を挙げた者が22.57、④「成長促進的な影響」を挙げた者が30.80であった。ただし、一元配置分散分析の結果、これらの間には有意な傾向は見られなかった ($F(4, 343)=1.635, p=.165$)。

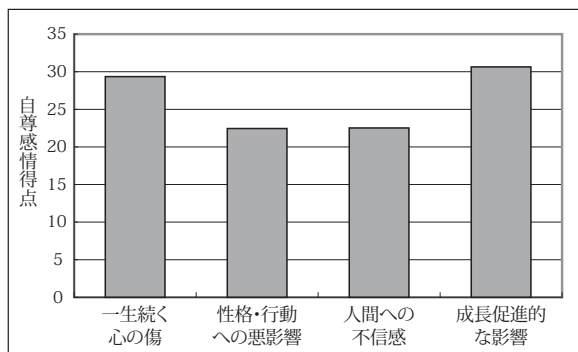


Figure 9 「被害者への影響」の内容ごとの自尊感情尺度の平均値

考 察

本研究では、いじめ加害の理由として最も多いのは、「周囲への同調」(25.0%)であった。これは、森田・清水(1986)のいう「観衆」や「傍観者」が一部のいじめ加害者に同調して加害行為をはやし立てたり楽しんだりすることを示している。これに関連する理由として、「自己防衛の手段」(7.9%)が挙げられた。これは、自分がいじめ被害者になることを防ぐために加害者に同調することを示している。これら2つの理由の合計は3割を超えていることから、「観衆」や「傍観者」は自分がいじめ被害に遭うことを恐れて加害者になる可能性が高いと言える。

また、いじめ加害の理由として、「相手の性格・行動・態度」(17.1%)や「相手の容姿や身体的な特徴」(3.9%),「相手の発達的な特徴」(2.6%)など、被害者の特徴を挙げた者が2割に上った。これらの理由に「自分の欲求不満の発散」(11.8%)を加えると、いじめ加害の理由の3割以上はストレスや欲求不満の解消に起因することを示している。神村・嶋田(1998)やRigby(1998)は、教師との関係や友人との関係においてストレス経験の多い子どもは不機嫌・怒り反応を示す傾向が高いことや、敵意性の傾向が高い子どもほど敵意に関するストレスを受けた場合に他者への攻撃行動が出やすいことを指摘している。「児童生徒の問題行動等に関する調査協力者会議」(1996)の調査では、いじめ加害生徒がいじめによって「気持ちスカッとした」や「おもしろかった」などと述べていることが報告されている。このことから、いじめ加害者の多くは、ストレス発散のためにいじめを行っていると考えられる。

また、「自分の欲求不満の発散」や「自己顕示欲求」は、自分よりも弱い立場の者をいじめることによって欲求不満を発散させたり、自分の優位性や力を誇示することによって自分を安定させようとするものであり、「仮想的有能感」(小平・小塩・速水, 2007)を反映していると考えられる。仮想的有能感は、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価し、軽

視する傾向に付随して習慣的に生じる有能の感覚」である（速水・木野・高木, 2004）。仮想的有能感が高い者は、ストレスを緩和するために「自分より下」と思っている相手にいじめを行なうと考えられる（小平・小塩・速水, 2007）。このことは、裏を返せば、自尊感情の低い者は自分よりも「劣っている」と思う相手をストレス発散の標的としていじめを行なっていると考えられることができる。

その他のいじめ加害の理由として、割合はきわめて小さいが「相手への忠告」（1.3%）があった。これは、すぎむら（2013）によれば、「正義感」にもとづく「加害」で、「いじめ」ではなく「性格矯正」のために「やってあげている」という感覚に相当すると考えられる。しかし、その結果として忠告される子どもはいじめの対象にされることになる。

いじめ被害の主な理由は、「人間関係のもつれ」（22.7%）、「自分の性格・行動的な特徴」（16.7%）、「容姿や体形」（16.7%）であった。これらの理由は被害者側にいじめられる原因があるということと密接に関係している。つまり、人間関係のもつれを生むような対人関係の在り方や性格・行動的な特徴に加えて容姿や体形といった個人的な要因がいじめ被害の主な理由となっている。いじめの加害理由の中で、「相手の性格・行動・態度」（17.1%）は、いじめ被害の理由とほぼ同じ割合を占めていた。このことは、「性格・行動特徴」は、いじめ被害といじめ加害に共通の理由であることを示している。内藤（2009）は、学校は狭い生活空間に人々を強制的に収容したうえで、さまざまな「かわいあい」を強制する場であるため、他者の感情を刺激するような「かわっている」部分をもつ子どもが「排除」されがちになると述べている。

本研究では、いじめの原因は被害者にあるという回答は加害者側に多かった。このことは、いじめ被害の原因はいじめられる側にもあるとする「被害者原因説」につながるものである。梅原（2010）は、大学生を対象に行った調査結果から、「被害者原因説」を次の4つのパターンにまとめている。第1のパターンは、いじめられる原因を被害者本人の特性に帰する考え方であり、いじめ

を温存させる基盤を形成している。これは、見て見ぬふりをする傍観者を生み出す要因ともなっている。第2のパターンは、いじめ加害に対して明確な罪の意識を持っており、その重圧から解放されたいために被害者に原因があると自分を思い込ませようとするものである。第3のパターンは、いじめられても無反応を装う被害者に対して憎しみを転化させるものである。この場合、自分でも「卑屈」であると認識はしているが、自分に反省的思考が向かわないように無意識に防衛しているため、攻撃性に歯止めがかからない可能性がある。第4のパターンは、加害者と被害者が相互に依存関係になっているために、仲間うちだと思いながらもいじめ―いじめられの状態が続いているものである。

中井(1996)は、いじめ被害者は、いじめによって「孤立化・標的化」されていく中で、「被害者さえ自分はいじめられても仕方がない存在だと思ひ込む」ようになり、この思い込みが加害者と傍観者に対していじめを正当化する根拠を与えることになる指摘している。

浜田（2013）は、「いじめの加害者たちにとって、そのとき意識の前景となるのは、被害者の味わっている苦痛ではなく、むしろその苦痛を素材にした自分たちの側の笑いであり、あるいは仲間内で示し合う意地である。これを被害者の側からみれば、自分の苦痛が相手には正面から受け止められず、ただ笑いの素材を提供しているにすぎない。それゆえに反撃することも抵抗することもできず、ただ我慢するか、あるいは相手の笑いに同調して自分もまた笑いで返すしかない。そして、ひたすら耐え、我慢し、その苦痛を自分のなかに鬱積させていくほかない。しかし、一方の加害者たちは、その被害者の味わう苦痛に対してはほとんど罪責感をもつことがない」と述べている。浜田の指摘は、本研究において加害者に原因があるという回答が5.5%と少なかったこととも関係していると思われる。

しかし、個人の性格や行動特徴を理由にいじめを正当化することは許されることではない。NHK「中学生日記」制作班(2008)が、番組に出演している現役の中学生130人の討論結果をもとにまと

めた報告書によると、①性格はうまれつきで身に備わっているから、そういう理由でいじめるのはおかしい、②いじめられる側に原因があるというのは、結局はいじめている側のいじめるための理由だと思う、と述べている。このように、多くの中学生は、個人の性格・行動特徴を理由にいじめをすることには否定的である。本研究では、いじめ被害者の8割は、「一生続く心の傷」(44.0%)、「性格・行動への悪影響」(28.0%)、「人間への不信感」(8.0%)といった悪影響に苦しんでいることから、いじめがいかにも非人道的なものであるかが分かる。

その一方、いじめに対する「否定・反対論」(51.3%)と並んで、いじめは良くないことであるが根本的に無くすことは出来ないという「根絶への悲観論」(17.9%)や、いじめは人間社会では必然的なものであるとする「肯定・宿命論」(10.2%)も見られ、いじめ問題の複雑さと根深さが改めて示された。そうした中で、いじめへの対策として、「学校や教師の役割への期待」(52.0%)、「被害者への支援」(18.0%)、「双方への支援」(16.0%)、「加害者への支援」(12.0%)、「傍観者への介入」(2.0%)などが挙げられた。特に、加害経験と被害経験のどちらも経験した者においては、「学校や教師への役割の期待」が有意に多かった。このことは、子どもたちは、直接は訴えなくても本心ではいじめの防止や解決を学校や教師に期待していることを示している。これに対して、学校や教師はその期待に応えていないという現実がある。尾木(2007)は、学校がいじめ防止や解決ができない理由として、加害者を正しく指導するという視点が欠落していることや、「いじめを受ける子に問題がある」と認識していることを挙げている。そして、いじめ加害者に対して、いじめることは自分にとって大きな「負」を抱えることだと認識させる必要があると述べている。本研究では、いじめ加害の影響として、「後悔」(50.0%)、「反省」(25%)、「自分の見つめ直し」(25.0%)などが挙げられた。この結果は、加害者が過去の加害行為に対する後悔や反省を通して自分自身を見つめ直していることを示しており、尾木(2007)の指摘の妥当性

を裏づけるものである。

本研究では、いじめに対して明確に反対したり、いじめは無くすべきことではあるが根絶は困難であると述べた者と比較して、いじめを仕方のないことであると受け止めたり、宿命的なものとして諦めている者や、いじめとふざけの区別が困難であると述べた者の自尊感情は低いことが見いだされた。また、いじめが性格・行動に悪影響をもたらしたり、人間への不信感をもたらしたりすると捉えた者も自尊感情が低かった。この結果は、いじめ被害を経験した青年においては自尊感情と精神的健康が低下するというWilkins-Shurmer et al.(2003)の指摘と一致している。一方、いじめの成長促進的な影響を挙げた者の自尊感情は高かった。このことから、いじめをどのように認識するか、またその影響をどのように捉えるかによって自尊感情に及ぼす効果は異なることが示唆された。

本研究の限界と課題

本研究は、大学生を対象に、小・中・高校時代のいじめ経験の想起に基づいて、いじめの捉え方について検討した。しかし、いくつかの限界があった。

1つ目は、過去にいじめ経験を正確に想起することが困難であると述べた者が少なからずおり、いじめの理由や原因、きっかけなどの自由記述欄が無記入となったままのデータがあったことである。

2つ目は、いじめの捉え方についての自由記述内容は、調査時点における調査協力者の考え方を反映したものであり、必ずしもいじめを経験した当時の考え方と一致するとは言えないことである。過去にいじめ経験を乗り越えることができた者は、いじめに対する意味づけをポジティブなものに修正している可能性がある。逆に、過去にいじめ経験の心理的苦痛に囚われている者は、いじめ経験をいっそう否定的に捉えている可能性がある。このことから、遡及的な研究では現時点における個人の適応状態が過去の想起に影響を及ぼす可能性があり、いじめを経験した当事者の当時の

考えを正確に反映したものとは言えない。したがって、今後は今現在いじめを経験している者やそれほど遠くない過去の時点でいじめを経験した者に対して質問紙調査や面接調査を行う必要がある。

3つ目は、調査協力者の分類基準に関するものである。本研究では、いじめ経験を「加害経験がある」「被害経験がある」「どちらの経験もある」「どちらの経験もない」に分けて、いじめに対する捉え方を比較検討した。しかし、いじめを森田・清水(1986)の4層構造で見たとき、「観衆」と「傍観者」は重要な役割を果たすことが指摘されている。「観衆」は加害者に同調していじめに加わっている可能性がある。「傍観者」は、いじめ加害に加担する場合、いじめの仲裁に入る場合、いじめと距離をとり客観的に見る場合、いじめ被害者になる場合などがある。それによって、いじめの捉え方も異なると思われる。本研究では、加害経験者と被害経験者は、それぞれ「加害経験がある」者と「被害経験がある」者、あるいは「どちらの経験もある」者として同定できるが、「どちらの経験もない」者が「観衆」と「傍観者」のどちらに属しているかを同定しなかった。今後は、「観衆」と「傍観者」を同定した上で、これらの者がいじめをどう捉えているかを検討する必要がある。

4つ目は、発達的な観点からの検討が欠けていたことである。本研究では、いじめ経験の時期を小・中・高校に分けて調査をしたにもかかわらず、いじめの捉え方については時期との対応関係を明確にすることができなかった。いじめ問題が対人関係や問題解決、葛藤解決などの発達と深く関係していることを考慮すると、今後はいじめ経験の時期に応じたいじめの捉え方を明らかにする必要がある。

参考文献

- Beane, A. (1998). The trauma of peer victimization. In T.W. Miller (Ed.), *Children of trauma*. Madison, CT: International University Press.
- Frisen A., & Bjarnelind, S. (2010). Health-related quality of life and bullying in adolescence. *Acta Paediatrica*, 99, 597-603.
- 浜田寿美男 (2013). いじめを非行・犯罪モデルで考えてよいのか—いじめの構図をあらためて考える— *こころの科学*, 170/7, 36-41.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 1-7.
- 神村栄一・嶋田洋徳 (1998). 学校・家庭ストレスと暴力模倣が中学校におけるいじめ加害行為の発現におよぼす影響の検討と教師による介入効果の検討: 学校ストレス尺度を用いた中学生に対する調査研究をもとに 財団法人カシオ科学振興財団平成10年年報, 94-95.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 *カウンセリング研究*, 32, 1-13.
- 川喜田次郎 (1985). KJ法—混沌をして語らしめる— 中央公論社.
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して— *パーソナリティ研究*, 15, 217-227.
- 文部科学省 (1996). 「児童生徒の問題行動等に関する調査協力者会議」報告書.
- 文部科学省国立教育政策研究所 (2025). いじめ追跡調査, 2010-2012.
- 文部科学省 (2007). いじめの定義 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302904.htm
- 森田洋司・清水賢二 (1986). いじめ—教室の病 金子書房.
- 内藤朝雄 (2009). いじめの構造—なぜ人が怪物になるのか— 講談社新書.
- 中井久夫 (1996). いじめとは何か *季刊仏教*, 37, 18.
- NHK「中学生日記」政策班(2008). NHK中学生日記DVDブック いじめ, なくしたい! 毎日コミュニケーションズ.
- 尾木直樹(2007). いじめ防止実践プログラム

- 学陽書房.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Rigby, K. (1998). The relationship between reported health and involvement in bully/victim problems among male and female secondary schoolchildren. *Journal of Health Psychology*, 3, 465-176.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- すぎむらなおみ (2013). 教員のもつ「ちから」こころの科学, 170/7, 47-53.
- Tehrani, N. (2004). Bullying: a source of chronic post traumatic stress? *British Journal of Guidance & Counseling*, 32(3), 357-366.
- 梅原利夫(2010). 大学生のいじめ意識についての考察—「被害者にも原因有」をめぐって— 和光大学現代人間学部紀要, 3, 41-58.
- Wilkins-Shurmer, A., O'Callaghan, M.J., Bor, W., William, G.M., & Anderson, M.J. (2003). Association of bullying with adolescent health-related quality of life. *Journal of Pediatric and Child Health*, 39, 436-441.
- 山本真理子・松井豊・山城由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 吉川延代・今野義孝 (2011). 中学生におけるいじめとストレスの関連性についての研究 文教大学人間科学部紀要 (人間科学研究), 33, 211-231.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2012). いじめの被害—加害経験と自尊感情との関係—大学生を対象とした遡及的調査研究— 文教大学人間科学部紀要 (人間科学研究), 34, 169-182.